令和６年度

入学試験問題

国　　語

２月１日　第１限

仁愛女子高等学校

一

次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。（設問の都合上、文章には改変・省略した箇所がある。また、設問に字数制限がある場合、句読点は字数に含むが、漢字の読み仮名は含まない。なお、本文の段落には1～18の番号が付してある。）

1 「自分探しの旅」とか「自分らしさの探求」というような言葉を僕はこれまでずっと「なんだか嫌な感じの言葉だな」と思っていました。それは、そういうことを口にする人間が、しばしば「管理する側」の人間だったからです。彼らは別に子どもたちや若者たちが成熟し、変化して、自由に生きることを求めているわけではありません。そんなはずがない。だって、そんなことになったら「管理しにくくなる」に決まっているからです。「自分らしく生きろ」という、一見すると子どもたちを勇気づけるように聞こえるメッセージは、実はその本音のところでは、「はやく『自分らしさ』という蛸壺を見つけて、そこに入って、二度と出て来るな」と言っているのじゃないでしょうか。

2 だって、そうじゃないですか。自分らしさを見出すことにそれほど価値があるのだとしたら、「これが『自分らしい生き方』です」と宣言した後に、「あ、やっぱりあれはなしにしてください。違う生き方がしたくなっちゃいました」と言い出すことにはかなりの心理的抵抗があるはずだからです。

3 一度生き方を決めたら、自分の「ポジション」を決めたら、あとは一生そこから出てはならない①という有形無形の圧力を「自分らしく」という呪符が生み出している……ということはないんでしょうか？

4 先日僕のところにメールを送ってくれた高校の先生がいました。その先生が僕に訊ねてきたのは、生徒たちが「自分が本当にやりたいこと」をはやく見つけることが学習指導のひとつの柱になっているけれど、それは正しいのでしょうか、ということでした。「はやく自分が本当にやりたいことを見つけなさい」と言うと、生徒たちはあきらかにストレスを感じているように見える。はたして時間を区切って、いついつまでに「本当にやりたいこと」を具申するようにというようなことを高校生に強制することに教育的な意味はあるのでしょうか、と。

5 これは本質的な問いだと思いました。

6 「自分らしさ」とか「個性」とか「本当にやりたいこと」とかいう言葉で装飾されていても、子どもたちは直感的にそれが「罠に

はめられて」「息ができなくなって」「身動きできなくなる」状態へ誘導するものだということを感じている。

7 [A]、「自分らしく生きなさい」という言葉に正面から反論するだけの理論武装は子どもたちにはありません。「『自分らしく生きろ』と言われていると、なんだかだんだん気分が滅入ってくるんですけれど、それはどういうわけでしょうか？」と力なく反論しても、たぶん先生も親も、誰もナットクのゆく説明はしてくれないでしょう。

8 どうしてこんなことになってしまったのか。

9 それは今の日本社会が、「成熟する」ということが「複雑化」することだということを認めていないからだと思います。逆に、成熟することとは「定型にオサまって、それ以上変化しなくなること」だと思って、そう教えている。

10 [A]、そんなわけがないじゃないですか。

11 生物を見てごらんなさい。単細胞の生物が細胞分裂して、どんどん複雑なものに変わってゆく。それが成長であり、進化である。人間だって同じです。成長するにつれて、どんどん複雑な生き物になるに決まっています。考え方が深まり、感情の分節がきめ細かくなり、語彙が豊かになり、判断が変わり、ふるまいが変わる。そういうものでしょう。

12 古代の中国の呉の国に呂蒙という武人がいました。武勇に優れ、それでみごとに立身出世を遂げたのですが、学問がなくて、「阿蒙」（おバカさん）と人に呼ばれていました。主君の孫権がそれを嘆いて、呂蒙に「武勇ばかりではなく、学問もオサめよ」と説きます。呂蒙は主君の助言に素直に応えて、学問に励むようになりました。しばらくして、同じ幕僚（注1）の魯粛と対談したときに、呂蒙の見識の高さと知識の深さに魯粛は大いに驚き、「あなたは以前の呉下の阿蒙にあらず」と嘆息しました。それに対して、呂蒙は「士別れて三日ならば、即ち更に刮目して相待つべし」と答えました。士は三日経つと別人になっている。[B]、目を大きく見開いてその人を見よ、と。

13 これは『三国志』にある逸話で、僕が子どもの頃までは、②人間が成長するとはどういうことかを教えるインパクトのある事例としてよく引かれたものです。[A]、僕は久しくこの言葉を口にする人に会ったことがありません。

14 たぶん、この三十年ほどの間のどこかで「成熟する」ということの意味に変化があったのでしょう。成熟するとは変化することである、三日前とは別人になることである、という古代からの知見が棄てられて、変化しないこと、ずっと「自分らしく」あり続けることがこの社会の中に居場所をえて、社会的承認をえるための必須の条件になった。③どうしてか知らないけれど。とにかく、そうやって、④日本社会がずいぶんと「息苦しい」ものになった。僕にはそんな気がするのです。

15 アクターのふるまいが絶えず変化すると、システムの制御[e]がむずかしくなる。［　B　］、システムの管理コストを最小化するために、人間たちは「成熟するな」という命令を下されている。知識や技能を量的に拡大するのは構わない。生産性を上げたり、効率的に働いたりすることは構わない。［　A　］、自分に割り振られた「分際[⑤]」から踏み出すことは許さない。ましてや別人になることは絶対に許さない。人[注2]をして「刮目」せしめるような生き方をすることは許さない。

16 システムの効率的な管理が大切な仕事であることを僕はもちろん認めます。［　A　］、システム管理の効率化を急ぐあまり、アクターである人間たちを同一的なままにとどめておくというのは長期的にはシステムの自殺行為ではないか[⑥]という気がします。もし、国民が成熟を止め、変化を止め、どれほど時間が経過しても「［　C　］」必要がなくなったら、その国ではもういかなるイノベーション[注3]も、どのようなブレークスルー[注4]も起こらないからです。

17 今の日本社会に瀰漫[注5]している「生きづらさ」はこの社会の仕組みそのものが「生物の進化」に逆行しているからだ[⑦]というのが僕の考えです。それを僕は「人間がサル化している」という表現に託したのです。

18 僕から皆さんへの個人的な提案は、「自分の身のほど」なんか知らなくてもいいんじゃないですかということです。「自分らしさ」なんか別にあわてて確定することはないです。三日前とぜんぜん違う人間になっても、それは順調に成長しているということですから、気にすることないです……というようなことです。みなさんが［　D　］から這い出して、深く呼吸[⑧]ができて、［　E　］が自由になったような気がすること、それが一番大切なことです。僕はそう思います。いかがでしょう。

（内田樹『サル化する世界』による）

（注）1　幕僚 ―― 指揮官を補佐する高等武官。
2　人をして「刮目」せしめる ―― 相手に目を大きく見開かせる。
3　イノベーション ―― 刷新。変革。
4　ブレークスルー ―― 進歩。前進。突破。
5　瀰漫 ―― 気分や風潮が広がりはびこること。

問一　二重傍線の部分(a)「ナットク」(b)「オサ」(d)「オサ」を漢字に直せ。（楷書ではっきり大きく書くこと。また、同じ漢字は用いないこと。）

問二　二重傍線の部分(c)「遂」(e)「制御」の読みをひらがなで書け。

問三　A ・ B に入る言葉として最も適当なものを選び、それぞれ記号で書け。

ア　なぜなら　イ　だから　ウ　そして　エ　ただ　オ　でも

問四　C に入る言葉を次の漢文【書き下し文】の中から七字で抜き出し、そのまま書け。

なお、【書き下し文】の大意は12段落を参考にせよ。

権(注1)の将呂蒙(注2)(注3)、初め学ばず。権、蒙に勧めて書(注4)を読ましむ。

魯粛(注5)後に蒙と論議す。大いに驚きて曰はく、「卿(注6)は復た呉下の阿蒙に非ず。」と。

蒙曰はく、「士別れて三日ならば、即ち当に刮目して相待つべし。」と。　（曽先之『十八史略』(注8)による）

（注）
1　権――孫権。三国時代、呉の建国者（呉大帝）。在位二二二～二五二年。
2　将――将軍。内田樹氏の文章の中の「幕僚」に相当。
3　呂蒙――呉の武将。生没一七八～二一九年。「蒙」も「呂蒙」を指す。
4　書を読ましむ――書物を読ませた。学問させた。
5　魯粛――呉の武将。生没一七二～二一七年。
6　卿――「あなた」の敬称。
7　即ち当に刮目して相待つべし――陳寿『三国志』には「即更刮目相待」（即ち更に刮目して相待つべし）とある。
8　『十八史略』――『史記』『後漢書』『三国志』など十八の歴史書を簡略に記した書物。

問五　次の文章は、問四に掲げた【書き下し文】の元（もと）の**《漢文》**である。これについて、あとの問い（1）・（2）に答えよ。

権将呂蒙、初不学。権、勧蒙読書。
魯粛後与蒙論議。大驚曰、「卿非復呉下阿蒙。」
蒙曰、「士別三日、即当刮目相待。」

（1）傍線の部分「卿非復呉下阿蒙」に、【書き下し文】を参考にして返り点をつけよ。（送り仮名・読み仮名はつけないこと。）

（2）次に掲げる言葉は「呉下の阿蒙」「刮目相待（かつもくそうたい）」と同様、『三国志』由来の故事成語である。［　　］に入る言葉を右の**《漢文》**の中から二字で抜き出し、そのまま書け。

［　　］百遍　義　自（おの）ずから見（あらわ）る

（【語意】どんなに難解でも、［　　］を重ねることで自然に意味が分かるようになる。）

問六　［D］・［E］に入る最も適当な言葉を［4］～［11］段落の中から抜き出し、そのまま書け。ただし、［D］は一字、［E］は三字とする。

問七　傍線の部分①「ない」と文法的に意味・用法が同じものを選び、記号で書け。ただし、同じものがない場合は、解答欄に「**ない**」と記入すること。

ア　人の意見に妥協しない。
イ　連戦連敗とは情けない。
ウ　この問題は難しくない。
エ　昨日の夜の記憶がない。

問八　傍線の部分②「人間が成長する」とはどういうことか。12〜14段落の中から最も適当な言葉を六字で抜き出し、そのまま書け。

問九　傍線の部分③「どうしてか知らないけれど」とあるが、筆者は、変化しないことが社会的承認をえるための必須条件になった理由を、本当は知っている。その理由を1〜3段落の中の言葉を用いて二十字以内で説明せよ。

問十　傍線の部分④「日本社会がずいぶんと『息苦しい』ものになった」とあるが、これについて、次の問いに答えよ。

(1)「息苦しさ」と同じ意味で用いられている最も適当な言葉を15〜18段落の中から五字で抜き出し、そのまま書け。

(2)　次の【小説】は、二〇二三年七月芥川龍之介賞を受賞した市川沙央『ハンチバック』の一節で、「息苦しさ」について言及している。また、【批評】は、小説家島田雅彦の「生存のための不服従」と題する芥川賞選評の一部である。これを読んで、あとの問い(i)・(ii)に答えよ。

【小説】

硬いプラスチックの矯正コルセットに胴体を閉じ込めて重力に抵抗している身体の中で、湾曲した背骨とコルセットの間に挟まれた❶心臓と肺は常に窮屈な思いをパルスオキシメーター(注1)の数値に吐露した。息苦しい世の中になった、というヤフコメ(注2)民や文化人の嘆きを目にするたび私は「本当の息苦しさも知らない癖に」と思う。こいつらは30年前のパルスオキシメーターがどんな形状だったかも知らない癖に。

【批評】

「私」が繰り出す悪態のカデンツァ(注3)は露悪を突き抜け、独特のヒューモアを醸し出し、悟りの境地にさえ達している。コトバも骨も屈折しているが、心は不屈だ。❷自発的服従者ばかりのこの国で不服従を貫く「私」の矜持(注4)に敬意を払う。

（注）1　パルスオキシメーター ―― 血中酸素濃度測定器。
2　ヤフコメ民 ―― ネットの「ヤフー！ニュース」に感想や意見を投稿する人。
3　カデンツァ ―― 独奏者や独唱者が演奏技巧を発揮させるために楽曲の終止部分の直前に挿入する華麗な装飾的楽句。
4　矜持 ―― 誇り。プライド。

（i）傍線の部分❶「心臓と肺は常に窮屈な思いをパルスオキシメーターの数値に吐露した」とあるが、このような表現技法を何というか。次の中から最も適当なものを選び、記号で書け。

ア　直喩　　イ　反復　　ウ　倒置　　エ　擬人法

（ii）傍線の部分❷「自発的服従」の同義語を次の中から選び、記号で書け。

ア　傲慢（ごうまん）　　イ　自覚　　ウ　忖度（そんたく）　　エ　自負

問十一　傍線の部分⑤「分際」と同じ意味で用いられている最も適当な言葉を15～18段落の中から五字で抜き出し、そのまま書け。

問十二　傍線の部分⑥「長期的にはシステムの自殺行為ではないか」とあるが、その理由を15～18段落の中から四十字で抜き出し、初めと終わりの五字をそのまま書け。

問十三　傍線の部分⑦「この社会の仕組みそのものが『生物の進化』に逆行している」とはどういうことか。文章の中の言葉を用いて四十字以上、五十字以内でわかりやすく説明せよ。

問十四　傍線の部分⑧「呼吸」は、「こきゅう」と読むが、ここではその他にどのように読むことができるか。**文脈に即して**、ひらがな二字で書け。

ちなみに、肺を病み、二十六歳の若さで死去した石川啄木は、

呼吸すれば、
胸の中にて鳴る音あり。
凩よりもさびしきその音！　（『悲しき玩具』による）

という短歌において、波線の部分「呼吸」にひらがな二字でルビ（読み仮名）をふり、「こきゅう」とは異なる読みを指示している。

問十五　次に掲げる言葉は内田樹の文章の要旨である。［　　］に入る言葉として最も適当なものを選び、記号で書け。

［　　］知らずのすすめ

ア　命　　イ　世間　　ウ　礼儀　　エ　身のほど

問十六　次に掲げる句は、内田樹の文章とその趣旨が同じである。［　　］に入る言葉を1～3段落の中から抜き出して書け。ただし、解答を記す際、表記は漢字・ひらがな・カタカナ、いずれも可とする。

［　　］や　はかなき夢を　夏の月　　松尾芭蕉

（【句意】夏の月が蒼白い光を投げかける静かな海の底で、獲物は明日までの命とも知らず、人が仕掛けた［　　］の中で短夜のはかない夢をむさぼり眠っている。）

二　次の四つの文章【Ⅰ～Ⅳ】を読んで、あとの問いに答えよ。（設問の都合上、【文章Ⅰ】には改変・省略した箇所がある。また、設問に字数制限がある場合、句読点は字数に含むが、漢字の読み仮名は含まない。）

【文章Ⅰ】

恋の話の前に、①私が越前に下った経緯を説明しなければならない。長徳二（九九六）年、父が十年の無職状態から浮上して、大国越前の守という官職をえたいきさつだ。

この年正月二十五日、地方官の人事異動(注1)「県召し除目」が行われて、父は淡路守に任ぜられた。一条天皇への代替わり以来、役人としての資格のみで仕事なしという状態に甘んじていたのが、ようやく定職にありついたのだ。だが父は喜ばなかった。淡路は、国の等級では最低の「下国」なのだ。

父は「申し文」を書いた。申し文とは、人事異動を希望する者が書く自己推薦状のようなものだ。朝廷に提出するのだから、もちろん漢文で記す。仰々しい言い回しや故事を連ねて、何とか目指す官職にありつきたい気持ちを表す。異動の季節には多くの官人がこれを書いて、天皇の、また朝廷のお恵みにすがるのだ。父はといえば、人に頭を下げるのが苦手なのだろう、まだそれを書いていなかったと思う。だがこの時は、②重い腰ならぬ重い筆をあげたのだ。十年日干しになった挙句に淡路国の守ごときかと、よほど③歯噛みする思いだったのではないだろうか。

父の申し文の一節は、いつの間にか世に流れ出て今も知られている。

苦学の寒夜、紅涙襟を霑す　　苦学に励んだ寒い夜は、つらさのあまり血の涙が襟を濡らした。
除目の後朝、蒼天眼に在り　　除目のあった翌朝は、［　X　］のあまり真っ青な空が目にしみる。

④いったい何が起こったのか、①私には分からない。だが除目の三日後、突然朝廷から言い渡しがあって、父は淡路から越前の守へと転ぜられた。越前は北陸道の大国だ。話によると、藤原道長殿がそのように指示されたのだという。除目では源国盛が越前守に決まっていたのを急遽停止させて、父にその官を回されたのだ。あの申し文に効果があったのだろうか。

父が越前守に任ぜられたことは、①私の将来にも陽がさしたということを意味した。冬の時代から春の時代へ、人生が変わる予感。それが本当になったのが、翌正月の恋だった。

（山本淳子『①私が源氏物語を書いたわけ　［　Y　］ひとり語り』による）

（注）1　県召し除目――京（都）の官職を任命する秋の行事（司召し）に対して、地方官を任命する春の行事。

【文章Ⅱ】

今は昔、藤原為時と云ふ人有りき。一条院の御時に、(注2)式部丞の労に依りて、受領に成らむと申しけるに、除目の時闕国無きに依りて、成されざりけり。

其の後、此の事を歎きて、(注3)年を隔てて直物行はれける日、為時博士には非ねども、極めて文花有る者にて、申し文を(注4)内侍に付けて奉り上げてけり。其の申し文に此の句有り、

苦学寒夜紅涙霑襟　　苦学の寒夜、紅涙襟を霑す

除目後朝蒼天在眼　　除目の後朝、蒼天眼に在り

と。内侍此れを奉り上げむと為るに、天皇の其の時に御寝なりて御覧ぜず成りにけり。

而る間、(注5)御堂、関白にて御座しければ、直し物行はせ給はむとて、内に参らせ給ひたりけるに、此の為時が事を奏せさせ給ひけるに、天皇申し文を御覧ぜざるに依りて、其の御返答無かりけり。然れば、関白殿女房に問はしめ給ひけるに、女房申す様、「為時が申し文を御覧ぜしめむとせし時、⑤御前御寝なりて、御覧ぜず成りにき」。然れば、其の申し文を尋ね出でて、関白殿天皇に御覧ぜしめ給ひけるに、此の句有り。然れば、関白殿此の句微妙に感ぜさせ給ひて、殿の御(注6)乳母子にて有りける(注7)藤原国盛と云ふ人の成るべかりける越前守を止めて、俄に此の為時をなむ成されにけり。⑥

此れ偏に申し文の句を感ぜらるる故也となむ、世に為時を讃め⑥けり、となむ語り伝へたるとや。

（『今昔物語集』による）

（注）2　式部丞 ―― 式部省の三等官。

3　年を隔てて ――「翌年」の意だが、実際には、一月二十五日に除目が行われ、三日後の一月二十八日に修正があった。

4　内侍 ―― 内侍所の女官。「女房」も同じ人物を指す。

5　御堂 ―― 藤原道長。「関白殿」「殿」も道長を指す。
6　乳母子 ―― 乳母の子。「乳母」は、母親のかわりに、子供に乳を飲ませ養育する女性。道長は国盛の母に養育され、国盛とは乳兄弟（ちきょうだい）の仲であった。
7　藤原国盛 ―― 正しくは源国盛。

【文章Ⅲ】

一条院の御宇（時代）、源国盛（みなもとのくにもり）、越前守に任（ぜられた）ず。その時、藤原為時、女房に附（託して）し書を献（提出した）ず。その状にいはく「苦学寒夜紅涙霑袖　除目春朝蒼天在眼」と云々（うんぬん）。天皇これを覧（み）、あへて御膳を羞（すす）めず。（まったく食事をとられなかった）夜の御帳（御寝所）に入り涕泣（ていきふ）して臥（泣き臥していらした）し給ふ。⑦左相府（さしやうふ）参入（参内し）し、そのかくのごときを知る。たちまちに国盛を召し辞書を進めしめ、（お呼びになり辞退の書状を提出させ）為時を以（もつ）て越前守に任ぜしむ。（任命された）国盛の家中、上下涕泣す。（みな涙にくれた）国盛これより病を受け、秋に及び（注8）播磨守（はりまのかみ）に任（なって）ずといへども、（任ぜられたが）なほこの病により、遂（つひ）に逝去（せいきよ）す、と云々。

（注）8　播磨 ―― 今の兵庫県南西部。大国・上国・中国・下国のうち、越前同様「大国」であった。

（『古事談』による）

【文章Ⅳ】

一条院の御時、越前の国あきたりけるを、（国司の席が空いたところ）源国盛、藤原為時、ともに望み申しけるに、（両人が拝任されることを願い出たので）御堂殿、とり申されけるにや、（取り計らい申したのであろうか）国盛をなされにけり。為時、愁（うれ）へに堪（た）へず、申文（まうしぶみ）を女房につきて奉りける。（託して天皇に奏上した）その詞（ことば）にいはく、

⑧苦学冬夜紅涙盈巾（きれ）（み）
除目春朝蒼天在眼

苦学の冬夜、紅涙、巾に盈つ
除目の春朝、蒼天、眼に在り

苦学の冬の夜には、紅の涙は手ぬぐいに満ちあふれ
除目の春の朝には、青い空は我が目に虚（むな）しく映じる

帝（みかど）（天皇）、御覧じて、供御（くご）も参らず、（お食事も召しあがらず）夜の御殿（おとど）に入らせ給ひて、（御寝所にお入りになり）御心労ありけるを、（お心を悩まされたのを）御堂殿聞きて、参らせ給ひて、（参内なさり）国盛を改めて、（解任して）為時をなされにけり。

（『十訓抄』による）

問一　X　に入る言葉として最も適当なものを選び、記号で書け。

ア　歓喜　　イ　憤慨　　ウ　失望　　エ　驚嘆

問二　Y　に入る人物名を漢字で書け。ただし、傍線の部分①「私」と同一人物とする。

問三　傍線の部分②「重い腰ならぬ重い筆をあげた」とあるが、「腰をあげる」の意味として正しいものを選び、記号で書け。

ア　行動に移すこと
イ　驚いて立てなくなること
ウ　続ける気を失くさせること
エ　落ち着いて物事に取り組むこと

問四　傍線の部分③「歯噛みする思い」とはどんな思いか。次の中から正しいものを選び、記号で書け。

ア　嬉(うれ)しい思い
イ　悔しい思い
ウ　悲しい思い
エ　楽しい思い

問五　傍線の部分④「いったい何が起こったのか」とあるが、これについて、次の問いに答えよ。

(1)　起こったことを含む一文を**【文章Ⅱ】**の中から抜き出し、初めの十字をそのまま書け。

(2)　**(1)の結果**、起こったことを含む十五字以上の一文を**【文章Ⅲ】**の中から抜き出し、初めの五字をそのまま書け。

問六　傍線の部分⑤「御前」⑦「左相府」が指す人物の組み合わせとして正しいものを選び、記号で書け。

ア　⑤　道長　⑦　道長
イ　⑤　道長　⑦　天皇
ウ　⑤　天皇　⑦　天皇
エ　⑤　天皇　⑦　道長

問七　傍線の部分⑥「けり」を適当な形に活用させよ。

問八　傍線の部分⑧「苦学冬夜紅涙盈巾　除目春朝蒼天在眼」とあるが、これについて、次の問いに答えよ。

(1)　返り点をつけよ。（送り仮名・読み仮名・読点はつけないこと。）

(2)　このような表現技法を何というか。漢字二字で書け。

問九　次の文章は「福井新聞」２０２３年８月24日付け記事の一部である。四つの文章（**【文章Ⅰ】**～**【文章Ⅳ】**）のうち、この記事と最も**関係が希薄なもの**をあとの選択肢から選び、記号で書け。

当初、為時が任ぜられたのは淡路国だった。平安時代の日本にあった約60の国は四つの等級に分かれ、越前国は数少ない最上位の大国だったのに対し、淡路国は最も低い下国に位置付けられていた。（中略）

為時はその嘆きを漢詩に託し、女房を通して一条天皇に奏上。天皇がこれを見て食事ものどを通らずに悲しむのを聞いた藤原道長が、既に越前国司に任ぜられていた源国盛を強引に辞退させ、代わりに為時を就かせたとの逸話が伝わる。

ア　文章Ⅰ　　イ　文章Ⅱ　　ウ　文章Ⅲ　　エ　文章Ⅳ

（下書き用紙）

令和六年度　仁愛女子高等学校入学試験問題　国語　解答用紙

受験番号

一

問一
(a)
(b)
(c)
(d)
(e)

問二

問三
A
B

問四

問五
(1)
卿非復呉下阿蒙。
（送り仮名・読み仮名はつけないこと。）
(2)

問六
D
E

問七

問八

問九

問十
(1)
(2)
(i)
(ii)

問十一

問十二
〈

問十三
40
50

問十四

問十五

問十六

二

問一

問二

問三

問四

問五
(1)
(2)

問六

問七

問八
(1)
苦学冬夜紅涙盈巾
除目春朝蒼天在眼
（送り仮名・読み仮名・読点はつけないこと。）
(2)

問九